

鶴間和幸・惠多谷雅弘監修

学習院大学東洋文化研究所・東海大学情報技術センター共編

『宇宙と地下からのメッセージ』

——秦始皇帝陵とその自然環境——

(学習院大学東洋文化研究叢書)

D-CODE 110111・三刊

B5 1000頁 10000円

本書は学習院大学東洋文化研究所一般研究プロジェクト「衛星データを利用した秦始皇帝陵と自然景観の復元」(2009-2010年、代表研究員・鶴間和幸)及び日本学術振興会・頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「リモートセンシングデータを利用した黄河流域の歴史と環境」(2010-2012年、代表者・鶴間和幸)の研究成果の一部である。プロジェクトの名前どおり、衛星画像をもとに始皇帝陵の自然景観の復元を行い、それを考古資料と合わせて論じている。

まず01・02節は、本書の主要な方法論である衛星リモートセンシングとはどのような技術なのか、衛星データはどのように活用できるのかを解説した導入部に当たる。そして03節以下、実際に各種データ・写真を駆使しながら具体的な事例が説明されていく。例えば03・04節では関中平原・西安の地理環境が示される。また06～09節は、関中平原や始皇帝陵周辺の地形を示し、始皇帝陵・驪山・前漢皇帝陵がその中でどのような場所に立地しているかを

考察したものである。10・11節では4K衛星三次元動画映像を作成し、驪山及び始皇帝陵をあらゆる角度から俯瞰・旋回して観察しており、多角度から見た写真が何枚も収められている。

衛星データを利用した具体的な成果は15節以下において主に示されている。15節では驪山北麓から北へ流れる古河道を復元した上で、五嶺遺跡(堤防)によって川の流れを変え、洪水から陵園を守ったことを検証している。16節では、華清池・始皇帝陵・兵馬俑坑北を斜めに走る断面図を作成し、これらの地点がほぼ水平位置にあること、兵馬俑坑も始皇帝陵同様に、五嶺遺跡によって浸水や土砂災害を避けることができるようになっていたことを指摘する。18節では、衛星データによって始皇帝陵の立地環境理解を実施した結果、陵園の中心的存在である墳丘の南北中軸線が真北よりわずかに東偏し、驪山山中の鄭家庄の峰を指向しており、この地点が始皇帝陵建造のランドマークとして使われた可能性が高いことを解き明かす。19節では、始皇帝の都市計画においては、渭水を天の川、咸陽宮をペガスス座、極廟を天の北極に見立てていると指摘する。20節では、中国で行われているリモートセンシングによる始皇帝陵の地下宮殿についての調査を紹介している。巻末には始皇帝陵に関する既発表の論文、段清波「皇帝理念下の秦始皇帝陵園」及び張衛星「秦始皇帝陵陪葬坑に関する新研究」が再録されている。

以上のように、本書はリモートセンシング・衛星画像といった、一般にはなじみの薄い技術を積極的に歴史研究に利用した成果をまとめたもので、そういった技術の実例が豊富な画像と

して示されており、その有効性が視覚的に分かりやすく読者に示されている。

なお、長谷川順二氏による本書の書評が『東方』三九二号（二〇一三年一〇月）に掲載されている。あわせて参照されたい。

（海老根量介）